【佳作】

Killing me softly with

理学部　化学科２年　吉永 悠希

秋を目の前に控えた空はきっと美しく、でも私たちの脚に吹く秋風ははっきり言って寒かった。嫌気が差すほどの過ごしやすい日常。二人の命日がこうやって良い日だというのはそれだけで見れば悪いことではないが皮肉に感じる。

せっかくだから、と昼は私たちの所持金が全て消し飛ぶような美味しいものを食べて、「最後の晩餐はやってみたかった」などと、ただ贅を尽くした昼食を楽しんだ。

そのあとは映画を見て、カラオケで喉を潰して、服を見て回ったり、特別なことがあったわけではない。ただいつもやっていることをいつもよりたくさんまとめて二人で過ごした。

遠くに朱色の空が沈んでいき、あたりは電気の明かりが見える。街の明かりに潰されて輝きの弱い星が現れ始める下に二人で座る。レジ袋から三五〇ミリと五〇〇ミリの缶を二つ取り出して、私は小さいほうのプルタブを起こす。心地よい炭酸の音が二つ、二人だけの屋上に響く。口を付け、一口。甘いリンゴの風味とやはり慣れない喉が熱くなるようなアルコールの感覚。

「どう？ リンゴのそれ美味しい？ 一口ちょうだい」

私の缶を受け取ってこくりと一口。「おいし～これもいいね」とかわいく微笑んで、でもすぐに自分のレモン味のものを飲みなおしている。

「もっと飲めたらな、酔いつぶれてるところ見たかったなぁ」

「あんまり好きじゃないって言ったでしょ。それにこれがジュースとか、生きてたら肝臓がだめになるのが次点だったでしょ」

少しずつ、少しずつお互いの缶の中身を減らしながら、最期にふさわしくない会話をして紺を深める空とそこに光るか弱い星を見上げる。お互いのブラウス越しにときおり肩が当たって、不意に私の手の甲に彼女の手が重なってくる。下心が透けて見え、ただ私一人でむず痒くなる。ただその手から逃げるように、一緒に買ってきたポテトチップスも広げる。彼女のそういうことを拒絶しているわけじゃない。ただちょっと、その状況を受け入れてゆっくりするのは難しいだけだ。

「もうないの、しょっぱいのが今ちょうど欲しいのに」

小さいサイズだったからか、いま私がつまんでいるものが最後の一枚だった。ぱりとその一枚を口に入れて、その一枚にありつけなかったのが不満げな目がこちらを見ているのが分かる。

「だから大きいのにしたらっていったの……、に……」

私の人差し指と親指とが温かで官能的な感覚に包まれる。短く切り整えられた清潔な爪と同性の私から見ても綺麗な細身の手が私の腕を掴んで。赤の髪に年相応の幼さを殺しきらないメイクの重ねられた、はっきりとした黒い目がこちらを見ている。その艶やかな薄桃の唇が私の指を挟み、柔らかな舌の上で転がされる。思わず手を引き、私の指は音を立てて彼女の口腔外へと戻る。

知らなかったわけでも気が付かなかったわけでもない。そんなことあるわけない。

「ねぇ、最期だもの」

私が後ろについた手に彼女の手が重なって、夜の明かりを映す目が間近に迫り、もう片方の手が私の頬にそっと触れる。

そっと、ただの一瞬の接吻を。目を閉じて、ただそこにある二人の境界をお互いに確かめる。柔らかな感覚と、お互いの呼吸の音、甘い匂いと残っ

た塩味、そして遠くにあるアルコールの残滓。
「これだけ。そんなんじゃないよ」
　最後のキスがこれだとは。彼女はこれまでいくつの男と唇を重ねてきたのか、本人も忘れてそうなのに、自分と重なったその唇はいつかは誰の物だったのだろうかと気にしてしまう。そんな私のことを気に留めることもなく、彼女は煙草を一つ取り出して火をつけている。
「一本、私にもちょうだい」
「いいけど、どうせ吸いきれないから。でも吸うっけ？」
「最後だもの、いいでしょ？」
　微笑んで、三本の指を差し出す。貰ったそれを咥えて、火を貰う。少しだけ、呼吸よりもはるかにゆっくりと、煙が口腔を埋めていく。不味い。ほうと煙を逃がして、彼女が加えたタバコの先が赤熱するのを眺める。
「どう、おいしい？」
「不味い。私はやっぱりお酒もタバコもいらないよ」
　他のなにも、ただこの二人だけの今さえあれば、きっとそうだと思う。
「そっかぁ、じゃあ禁煙頑張ってる私もいつか居たのかな」
「何？私のために禁煙頑張ってくれたかもって？」
「そうだよ」
　彼女は口角を柔らかに上げてタバコの火を地面で潰し、すっと立ち上がる。私のタバコの火はまだ半ばほどにあった。
「飽きた。残ってるやつ吸う？」
「いや、いいや。今じゃないと多分いつまでもこの時間が愛おしくなってしまう」
「おっけ。じゃあいこっか」
　暗く涼しい秋の夜、制服姿の女子二人で地表から十五メートルの屋上に立つ。飲み食いしたものをビニール袋に纏めて、荷物と一緒に置いておく。脱いだ二対のローファーを外向きに揃える。
　ろくでもないこの世界がこれ以上醜くならないように。美しいこの空間が侵されない内に。私だけではきっと決められなかったことだから、二人で一緒ならきっと、幸せに。
　柵を後ろに掴んで地表を見下ろす。怖いのかもしれない。人間の本能的な恐怖で身体が震えて縮こまる。右手に指が絡んできて、お互いに手を強く握る。
　二人なら大丈夫。ここでは無理だったけれど、きっとどこでも二人なら、大丈夫。私にとっての全ての価値が、今右手に握られていて、その温もりは身体の凍えを溶かしてくれる。
「大丈夫だよ。二人一緒だから」
「そうだよ、二人だもの」
　微笑み、見つめあう。彼女の目ははっきりと決断を露わにして、その眼を見れば私だって選び取れる。この時間が手放せなくなってしまう前に覚悟を決める。
　ふたり、呼吸が揃って前へ。繋いだ手は離さず、この世に繋ぎ止める私の左手と彼女は右手を離して。靴下越しに感じていた冷たいコンクリートの硬さがなくなって、暗い夜の空にただ二人きり。天地が返り、頭に風圧を受けて、導かれるままに。
　唯一の存在意義と一緒に、今私は人生を捨てるのだ。

　痛みで目が覚めた。目が覚めることなどないはずなのに。天国、あるいは地獄なんてものは信じていない。しかしここに確かに意識がある。
　暗い秋の夜、あの時確かに一緒に飛び降りた。そうだ一緒に飛び降りたのだ。だから二人で一緒に死んで、こんな世界からはおさらばできるはずだった。
　しかし今、私の目には白の天井と消灯された蛍光灯とが映るばかりで、理解ができない。いや認めたくない。なぜ、なぜ、どうしてここに居るのか。
　とりあえず起き上がらねば何も分からない。全身に痛みが走るのを堪え、鈍い腕に体重をかけて起き上がろうとする。だが身体が持ち上がらない。柔らかなベッドの上で踏ん張りがきかないと言えど、まるで力が入らない。なにより、腰より下の感覚が失せていた。
　必死に力を入れようと、脚はぴくりとも動かない。どころか、腕の力も自身に被さるシーツを除けることさえ手間取る程に衰えている。数分もがき、諦めた。何を必死になっているのか分からなくなった。

白の部屋に白の着衣、誰でもわかる。私は入院している。確かにあの時死んだはずなのに、身体の自由が利かない状態で病床に磔にされている。茉莉花はどこにいるのかすら分からない。

それからしばらくすると医者が来た。脊髄損傷による下半身不随及び他神経の麻痺があるだろうと、そして命に別状はないと、その医者は私に告げた。その受け入れがたい事実を、私はただ茫然と聞いているだけだった。

朱に染まった葉を零し行く木をガラス越しに眺める。二つの葉が風に吹かれ、お互いの螺旋を描くように落ちていく。くるくるとそのまま、二つの葉は重なって地に落ち、しばらくして通りかかった人間にまとめて踏まれていた。

私と茉莉花だって本当は一緒に死ぬはずだったのに。ただ白い病室の中、全身を覆う痛みと緩やかな絶望に包まれて、身動きもろくに取れずにただ時間が過ぎていった。

身体の疲労には抗えず、目が覚めると再びの朝が訪れる。本来見ることは無かったはずの朝日から漏れる光が白の病室を穏やかに照らす。身体も心も快方に向かうことは無く、地続きの感覚が張り付いている。

ふと思い至る。私がこうして死に損なっているのならば、茉莉花もまた私と同じように死に切れていないのではないかと。そのような淡い期待が一瞬過り、そして裏切られた。

昼過ぎ、私が伏せる病室に来客があった。意味なく時間を溶かしている最中、戸が引かれる音がしてそちらを向く。

「緋井須 恵莉花さん、でお間違いないですか」

第二次性徴が終わり切っていない、まだ幼さが残る男声でそう尋ねられる。声の主はブレザー姿の、きっと自分よりも若い男の子だった。

知らない男の子。ただ唯一、そのこちらに向けられた黒い目には覚悟の色が浮かんでいるように見えた。あの夜の日、私を一緒に連れて行ってくれるはずだったあの茉莉花の黒い目を思い出す。私の燻る願望を再び突き動かすほどに、その目はよく似ている。

「初めまして、樋曽 慧斗と言います。姉の、新坂茉莉花の弟です」

弟。茉莉花の弟とその子は言った。

そう聞いて、去年の春のことを思い出した。

昼下がり、僅か数百円のフライドポテトを対価として、入客の少ないファミレスに居座っている。

「あー妹が欲しかった。五つくらい下の妹とかさ、いたら絶対かわいがるのに」

「いやー居ても自分と似てるやなところばっか目についてそんなもんじゃないよ」

「あれ、妹居たの？」

「いや弟。っつってもう数年顔見てないけどね。父親のほうに引き取られてるから、それ以来は見てないかも。二つ下でね、自分と似てる人間を見るのはなんか変な気分だし。ほとんど記憶もないけど、嫌いな食べ物めっちゃ同じで気持ち悪かった。ガキだし」

茉莉花の両親は茉莉花が八歳くらいの頃に離婚したとは聞いていた。茉莉花は母親に、弟は父親に引き取られたとも聞いていた。

目の前の慧斗と名乗った少年は、そう聞けばどこか雰囲気が似ていた。短髪の髪に、きっと男子だと平均くらいの背丈も茉莉花とは全く違うけれど、その目は全くと言っていいほど同じだった。

「茉莉花の弟くん、なの。っ、茉莉花は！いま茉莉花はどこにいるの！」

「姉さんは亡くなりました。」

あぁ、やはり希望などなかった。「亡くなった」とその単語だけなのに、それを聞いた途端に酷い絶望が勢いを増して、私の心に闇を降ろす。

置いていかれてしまった。

このわずかな間でも、夢を見ていたかった。二人一緒に死に損なって、同じように身体の自由を失って。二人でお揃いの絶望を分かち合うならば、果て無き苦しみだとしても意味があったのに。その些細な望みは今断たれた。

「緋井須さん、僕は」

「出てって」

「あなたなら姉さんの」

「出てってって言ってる！」

彼の言葉を遮って声を荒げる。

「すいません、また来ます」

彼が戸を閉め、また独りの病室へと戻った。

抑えきれない情動が湧きあがる。死にたい。

死にたい、ただそれだけの願い。運命共同体だと信じていたのに、裏切られた。違う、私が裏切った？

一緒に死を約束したのに茉莉花だけ先に行ってしまった。違う、私が付いていかなかった？

二人一緒であることが、あるべき形であると思っていた。違う、まさか、そんなことは。考えたくもなかった。

今すぐにでも、茉莉花の下へ行かなけらばならない。

許容を超えた感情の渦が零れてしまう。右手の爪を左の手首に立て、引っ掻く。けれど自分の柔肌をこれっぽちも傷つけることなく、ただ表面を撫でることしかできない。私の腕にそれほどの力は今はない。

その事実が、自らを傷つけることすら許されないことが、どうしようもなく私の心を痛めつけて、感情は一層加速する。両の手で首を掻きむしっても、やはり出血なんてもってのほか、痛みすら感じられない。

この瞬間から、私の生は以降無価値であることを理解した。そうして、ただただ声にもならず叫びたい気持ちを偽物の涙と共に零す以外に私には何事も許されていなかった。

その夜、私の両親も見舞いに来た。あぁ、分かり切っていたが薄情な親だ。揃って仕事にかまけて私のことなど見ていなかったのに。私がこうなったと言うだけでまるで親の面を下げてやってくる。

よかった生きててくれてよかった。そういって私に縋りつき啜り泣く母親。なぜ飛び降りなんてしたのかと叱ってくる父親。そのどちらも結局自分が可愛いだけだ。私の真の居場所なんかではない。自分の付属品、所有物、手塩にかけて育てたものを失うのが怖いだけ。あるいはそれが真っ当な人間であってくれないと困るという、結局自分本位な人間だ。私のためではない。

私の居場所はやっぱり茉莉花の隣でしかない。茉莉花には私が必要だったし、私には茉莉花以外必要ではない。

両親を拒絶して病室から追い出すと、また独りの時間に戻る。独りになって、自分の願いを何度も確かめる。あの時から、私の運命は決まっていたはずだった。

茉莉花と会ったのは中学の頃。そのころから彼女は可愛くて、でもただの友達だった。化粧をしては先生に怒られ、勉強の成績はほどほどで、みんなの憧れの先輩に恋するそういう子だった。

決定的に変わったのはその秋、茉莉花は夏休み前にその先輩と付き合い始めたと聞いた。中学生にもなれば皆恋愛を始めるんだと、その時はそうとだけ思っていた。

私が夕飯の食材を買ってきた帰り、途中泣き声が聞こえた。帰路から少し外れ、人気のない河川敷で茉莉花を見つけた。目の下を真っ赤に腫らして泣き続けている茉莉花をみて、その時私の何かが揺らいだ。

「茉莉花？なんでこんなとこで泣いてるの」

「恵莉花……私、私、」

私に気づいた彼女は一層涙の勢いを増して、どうしようもなかったので近かった私の家に上げた。

付き合っていたその先輩とうまくいかなかったらしい。端的に纏めればそうだった。今日は二人でカラオケに行ったのだと。それまではそんなことなかったのに、先輩に体を触られた。キスを迫られて、嫌だと言っても触ってくる先輩の手は最初は手や頭に留まっていたが、胴に近くなったときいよいよ耐えられなくなって逃げだしてきたと。

嗚咽交じりにそう教えてくれた茉莉花をぎゅっと抱きしめて、そうするともっと泣き出すから泣き止むまでずっとそうしていた。

その時に、「あぁきっとこうあるべきなんだな」と漠然と初めて感じた。

私のオリジンを回想して、気が付くと寝ていた。

そして朝目が覚めて、幾度と願った死を想像する。死にたいほどの絶望なんてあるはずはない。だって死は手段ではなく、目的だったから。二人一緒に華々しく散るのだと、そう願っていたから。

それなのに、また一日を迎えてしまう。痛みと苦しみの刻まれた心身を、仕方なく受け入れる。

そういえば今がいつなのかも分かっていなかった。見渡してもカレンダーが無い。そういえばスマートフォンも、他の荷物もない。世界に一人き

り、その外側に放り出されている。
　意味のない時間を過ごす。そして昨日と同じ少年が私を世界に引きずり戻してくれる。昨日と同じブレザーと、あの至上の黒の目の少年が目の前にいる。
「何しに来たの」
「また来ました。緋井須さんには聞きたいことがあるんです」
「何、私は君とほとんど接点がないけど」
「でも緋井須さんは姉さんの一番近くにいた人だと聞いています。」
「……だから、何」
「教えてください。姉のことを」
「何で？」
「姉さんが死んだ理由を知りたいと、それだけではいけませんか」
　真っすぐな目で彼はこちらを見つめる。
「とりあえず今が何日か教えてよ」
　その目を見て、この目のためならと一瞬思った。だから気まぐれだったのかもしれない。
　私と茉莉花が飛び降りたあの日から、今日が一週間目になるそうだった。その間、茉莉花の葬式は終えられたと。私の居ない内にあらゆることが片付いていた。
　もしかしたら、私がいなくても茉莉花は、と思う。
　高校生になって、けれど私と茉莉花は違う高校に進んだ。あの決定的な秋から、定期的に茉莉花はころころと彼氏を変えていた。そのたびに程度の差こそあれ、別れては傷つき、その傷を私が抱きしめて。そのたびに私にとっての茉莉花の存在が大きくなっていった。
　高校生活に馴染み始めるころ、いつもの通り茉莉花から連絡があって、でもその時はいつもと様子が違った。
　連絡から数十分して、茉莉花が家に来た。化粧をして、最近流行のピンクのブラウスに黒のスカートを着て、涙と崩れたメイクとで酷い顔をしていた。
　出会ってすぐに抱き着いて、アルコールの匂いがした。よく聞けば呂律も少し外れている。
　あの時と同じように茉莉花を抱きしめて、泣き止むのを待つ。これまでと同様にまた外れの男を引いた。いつもと違ったのはその程度で、今度はいよいよ彼女は一線を越えてしまった。
　元より予感はあった。傍から見れば尻軽と言われるような男癖で、とっかえひっかえ男が変わって今度は大学生。身体の関係を持つことも予想できなかったわけではないだろう。事があってから聞けば二日経っている。その時は平気だったと、でも今になってどうしようもなくなったと。そうやって苦しむ茉莉花を見て、抗いがたい恍惚とした感情に苛まれる。
　ぐちゃぐちゃに乱した表情と、細かく刻まれる呼吸の音。彼女の心臓から私の心臓に伝わる異なる鼓動。その誘惑に抗うことはできず、その感覚に身を委ねる。
「酷いね、こんなに蔑ろにして、傷つけて。それでなにもないなんて。自分の好きにしただけでそのままポイなんて。別れちゃえば正解だよ」
　茉莉花の頬と首の後ろに手を回して顔を近づける。あと一寸、その一瞬のはずが無限に近く遠くに感じられて、私の心を昂らせる。
　お互いの吐息がお互いの唇を湿らせ、そして触れる。自分の内にあったこの矢印の扱いを誤らないように、ゆっくりとその時間を噛みしめて。少しずらして、もう一度。離れて、茉莉花の唇を食み、その心地よさが私の欲を一層刺激する。
　私が求めて、彼女が受け入れる。お互いの境界線がとろけてしまう。左手は茉莉花の首に回したまま、茉莉花の両手が私の頬に優しく触れる。右手で茉莉花の服をずらして、その下の滑らかな肌を滑らせる。
　際限のない甘美な心地に溺れて、二人沈んでゆく。
　世界はここだけで完結し、それ以外の一切は敵であるとさえ勘違いできるほどに。
　私と茉莉花はそう以て生まれてきたのだと、そう思っていた。
　あの時、世界が変わったと信じるその時を思い出した。
「いいよ。ただその前に君が茉莉花のことをどれだけ知ってるかだけ教えてよ。茉莉花は君と会ってないって聞いてたよ」
「一年前、久々に食事をしたときから連絡を取っ

て時々会っていた」
「知らなかった。じゃあ茉莉花の男癖の悪さは」
慧斗は答えない。平静を装っているが動揺しているように見える。定期的に会っていたとはいえ、やはり茉莉花にとっての一番にあるべきは私だと、優越感があった。
「あれはね、尻軽ってレベルじゃないよ。君と同じ年には処女捨ててたし。それからも何回男を変えてたか知らないよ」
「そう、ですか」
「茉莉花のこと軽蔑した？」
「少し、時間をください」
「いいよ私はどうせ動けないし。また来なよ。私の意味のない世界に意味を頂戴」

次の日、昨日帰る時にはそこそこ落ち込んでいたと思っていたけれど、慧斗は懲りずにまた来た。
「今日は姉の私物を持ってきました」
そういって彼が取り出したのはよく見たスマートフォン。違いない、茉莉花のものだった。
「どうしたいの」
「中身が見たいと思いませんか」
「君、なかなかゲスいね。かなり最低なことしてるよ」
私の腹の上に茉莉花のスマートフォンが置かれる。
「でも流石に私だってパスワード知らないけど」
「心当たりとか、ないんですか」
力なき手でスマートフォンを表にしてロック画面を開く。
四桁の数字、未だにこんなセキュリティとは、もしかして私がこれも面倒見てあげたほうが良かったか。茉莉花の誕生日と私の誕生日、一応慧斗の誕生日を入力して弾かれる。
安直とは思い、私と茉莉花の誕生日の和を試してこれも弾かれる。茉莉花と慧斗の誕生日を入力して、開いてしまった。
「ねぇ、とりあえず一人で見ていい、これ」
「いいですよ。じゃあまた来ます。あした、今度は自分に見せてください」

次の日、また慧斗は来た。茉莉花と同じ綺麗な目をした少年。しかし今の私にとってその意味は異なる。
「スマートフォンの中身、どうでしたか」
「隠し事してるよね」
慧斗は答えない。当然だが、今更黙ったところで何の意味があるのか。
「スマートフォンみたら大体察し着くよ。定期的にって、週一で？アツいじゃん」
この世で唯一縋っていたものを、そのクモの糸をぷっつりとぶち切られたのと同じだった。
「こっち、来なよ」
私のベッドの横に歩み寄ってくる。
「ねえもっと、近づきなよ」
か弱い手を伸ばして、茉莉花によく似た、けれど第二次性徴半ばの少年の硬い頬に手を当て、顔を引き寄せる。
そして、その唇を奪う。女ではなく男の唇。それを強く吸って、唇を中にねじ込む。よく知ったタバコの味がした。
「ふぅん、それも教えてもらったんだ。おんなじなんて、バレるでしょ。ねぇ、茉莉花と何回やったの？まぁ答える必要もないけれど」
息継ぎの代わりに問い詰める。
「私の茉莉花を奪って、その奪った相手にこうされる気分はどう？茉莉花に教えたのは私。だからほら、上手でしょう？」
もう一度、舌を絡めてまた慧斗の舌もこちらに絡まる。
「上手じゃん。才能？そうやって茉莉花としてたんだ、ふぅん」
こんな相手嫌なはずなのに、お互いに舌を絡めて、客観的に見れば求めあう。
慧斗の舌がもう一度絡んできたとき、私は歯を立て、噛み千切る。
あまりの痛みに耐えかね、慧斗は身を引く。畏怖、その表情。
昂る心と破滅の願いを身に宿し、私は言う。
「ねぇ、男の子でしょう？自由の効かない私を好きにしたらいい。ほら」
胸元をずらして、最期の時を待ち侘びる。

コメント

初めての応募となります。私にとって、歪みとは美しく、また大きな感情は愛だと思うのです。最近流行の女性同士での関りの物語ではありますが、私の思う耽美をこの作品で表現したかったのです。

私のこよなく愛する作家は「読んだ方の心に残る物語を書きたい」と、そして私もまたそう思うのです。私の作品に未だそれだけの力があるかは定かではありません。ですがそうは至れずとも、「読んだ方の心を動かせる物語を書きたい」と、尊敬を込めてそう思います。そしてこの作品がそうあれることを願って、そうあれば嬉しく思います。